

この伝承から、三輪山は神婚説話に裏打ちされた大和の国の神が鎮座する山であることがわかる。額田王は、近江遷都に際し、この三輪山に対して惜別の歌を詠ったのである。歌中「綜麻かたの」とある語の解釈として、三輪山の山容を「綜麻かた」（糸巻き）の形に譬えるのも、当該の伝説がもとになつているとされている。

さて、人々の反対を押して切つて遷都した近江京では、文化的な一時代が築かれたとされる。

その様子は、日本最古の漢詩集である『懷風藻』の序文に記されている。

淡海先帝の命を受けたまふに及至びて、帝業を恢開し、皇猷を孔闡したまふ。道は乾坤に格り、功は宇宙に光れり。既にして以て為ほしけらく、風を調へ俗を化むることとは、文より尚きこととは、莫く、徳を潤らし身を光らすことは、

敦か学より先ならむと。爰に即ち庠序を建て、茂才を徴し、五礼を定め、百度を興したまふ。憲章法則、規模弘遠、寛古より以来、未だ有らず。是に三階平煥、四海殷昌、流絜無為、巖廊暇多し。施文學の士を招き、時に置醴の遊を開きたまふ。此の際に当りて、宸翰文を垂らし、賢臣頌を献る。雕章麗筆、唯に百篇のみならず。以下略）

当該の序文は天智天皇が天命を受けて即位されるにおよび、天子の事業を広め、天子の道やその功績がたまなく天下に輝き渡つたことを述べ、次に天皇が風俗を整え、民を教化するに、「文」（学問）より貴いものはない、学問が最優先であることに思い至つたことを述べている。そこで、学校を建て、秀才を召し、五礼を定め、諸々の法度を興し、定め

た。そして、立派な宮殿を擁した朝廷は、天子が何もしなくても世の中が治まつているので暇が多く、しばしば酒宴が開かれ、天子自ら詩を作り、賢臣は讃詞を献上した。美しく飾られた詩文は百篇を超えていたという。

こうした酒宴の遊興で詠われたであろう歌が額田王の歌として残されている。

近江大津宮に天の下治めたまひし天皇の代「天命開別天皇、諡を天智天皇といふ」

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山万花の艶と秋山千葉の彩とを競ひ憐れびしめたまふ時に、額田王、歌を以て判る歌

冬も春も春さり来れば鳴かざりし鳥も来鳴きぬ 咲かざりし花も咲けれど山をしみ入りても取らず 草深み取りても見ず 秋山の木の葉を見ては黄葉をば取り

飯綱山火まつり

八月十日 於・信州飯綱山麓



大座法師池周辺で行われた柴燈大護摩供

てそのふ青きをば置きてそ嘆くそこし恨めし秋山そ我は（巻一・二六番歌）

おそらくは天智天皇臨席の漢詩宴で、天智天皇自ら「内大臣藤原朝臣（中臣鎌足）に命じて、「春山万花艶」と「秋山千葉彩」とを競わせて漢詩を作らせたのであろう。ところが、なかなか決着がつかない。そこで、額田王が「歌」でこれに決着をつけたのである。はじめ

に、鳥が鳴き、花が咲く春の良いところを上げる。しかし、それらを手にとつてみることができないことを惜しむ。次に秋の紅葉を手にとつて賞美できることをあげ、しかし、未だ紅葉してないものは手に取ることができないと惜しむ。そこが恨めしいが、私は秋が良いと息に詠いあげている。まるで歌合の判詞を思わせるような一首であり、季節感を詠う歌としては最も早い一首でもある。

『万葉集』から見る日本の古典

獨協大学特任教授 城崎 陽子

近江遷都 — その2 —



琵琶湖畔

先回は百済救援の敗戦にともなう戦後処理として最も大きな出来事である近江遷都を取り上げた。『万葉集』に、この遷都に際して三輪山への惜別の情を詠う歌が残されていることは既にふれたが、なぜ三輪山なのかという伝説の前半を扱ったところまで紙数が尽きていた。今回は三輪山伝説の後半をみた上で、近江朝廷の文化的様相にまでふれておく。

まずは、『古事記』の三輪山伝説後半を次に載せる。

此の、意富多々泥古と謂ふ人を、神の子と知りし所以は、上に云へる活玉毘売、其の容姿端正し。是に、壮夫有り。其の形姿・威儀、時に比無し。夜半の時に、儼忽ちに到来りぬ。故、相感て、共に婚ひ供に住める間に、未だ幾ばくの時も経ぬに、其の美人、

妊身みき。爾くして、父母、其の妊身める事を怪しびて、其の女を問ひて曰ひしく、「汝は、自ら妊めり。夫無きに、何の由にか妊身める」といひき。答へて曰ひしく、「麗美しき壯夫有り。其の姓・名を知らず。夕毎に到来りて、供に住める間に、自然ら懐妊めり」といひき。是を以て、其の父母、其の人を知らむと欲ひて、其の女に誨へて曰ひしく、「赤き土を以て床の前に散し、へその紡麻を以て針に貫き、其の衣の襦に刺せ」といひき。故、教の如くして、旦時に見れば、針に著けたる麻は、戸の鉤穴より控き通りに出で、唯に遣れる麻は、三勾のみなり。爾くして、即ち鉤穴より出でし状を知りて、糸に従ひて尋ね行けば、美和山に至りて、神の社に留まりき。故、

其の神の子と知りき。故、其の麻の三勾遣りしに困りて、其地を名づけて美和と謂ふ。此の意富多々泥古命は、神君・鴨君が祖ぞ。

三輪山伝説の後半は前半に登場した意富多々泥古が大神の子孫である由縁を語る神婚説話になつている。ある時、活玉毘売のもとに夜ごと美しい男が通つて来た。彼女は程なく妊娠する。両親は、その男の素性を知りたいと思ひ、娘に、男の着物の裾に麻糸をつけた針を刺しておくように教える。翌朝、「鉤穴」からでたその糸をたどつて行くと、三輪山の神の社に糸が続いていた。男の正体は三輪山の大神大物主であったのだ。意富多々泥古は、大物主大神が活玉毘売に生ませた子の子孫であり、大物主大神を祀る「神主」にふさわしい資格をもつことがわかつたのである。